

日 時： 平成22年11月29日
ところ： 宗務院
主 催： 日蓮宗生命倫理研究会

釈尊は生と死を どのように語ったか

講師

身延山大学

池 上 要 靖

健康関連QOL概念図



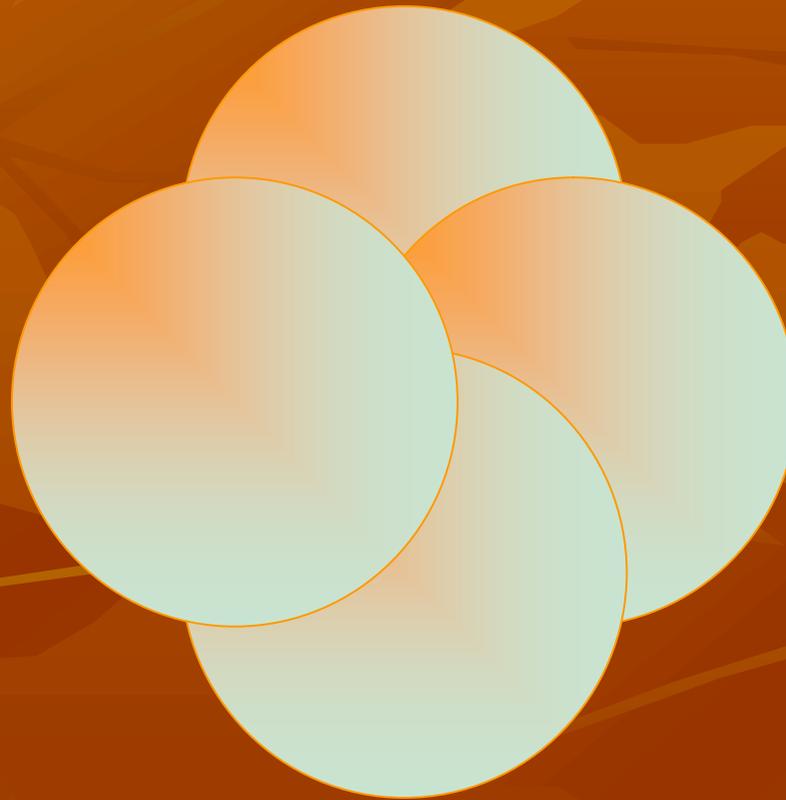
命の状態

身体＝物質

宗教、文化

社会、制度

意識作用＝心



「命」を取り巻く問題

■ 危機に瀕する「命」

(生)命 ⇒ 身体 ⇒ 社会、文化 ∈ 権力 ∈ 暴力

・ 命をめぐる問題・・・「ヒポクラテスの誓い」

「医術とはおよそ病人から病巣を除去し、病患からその苦痛を減じることである。そして病患に征服されてしまった人に治療を施すことは、医術の及ばぬところと知って、これを企てることを断ることである。」(『古い医術について』)

「命」を取り巻く問題

- C.W.Hufeland (1762-1836) の主張する医療倫理
「単に治療するばかりでなく、不治の病においても生命を維持し、苦痛を和らげることもまた医師の責務であり、その大きな功績である。・・・死に瀕した場合でも、医師は病人を見捨ててはならない。そのようなときでも、医師は患者の役に立つことのできる人でありうる。そして、たとえ救うことが出来ずとも、死を和らげることはできるのだ。」(「医療倫理」1806年)

身体観（スッタニパータ194～200偈）

- 骨と腱でつながれ、肉と内皮で塗られ、肌で覆われ、（自分を）ありのままに見ることはない。
- 身体は腸や胃で充ち、肝臓、心臓、腎臓、脾臓、粘液、汗、脂肪、血液などがある。
- 目から目やに、耳からみみだれ、鼻から鼻汁、口から胆汁や痰、身体から汗と垢が出る。
- 頭は空洞で脳髄に充ち、愚か者は無明に導かれ、それを美しいと思う。
- 身体が死んで横たわり、膨れて青黒くなり、墓に捨てられると、親族も顧みない。

ダンマパダ(148~151偈)

- 衰えたこの姿は、病の巣であり、壊れやすい。腐った身体は、壊れる。生命は死に瀕す。

……………(中略)……………

多くの骨で身体は作られ、肉と血が塗られ、
そのところに老と死と慢心と偽善が蔽った。

とても美しい王の車も朽ち果てる。身体も老いて
ゆく。しかし、善き人の正しい法は老いることはない。
善き人はお互いに理法を説き、聞く。

分別論 (vibhaṅga) では・・・

- 比丘たちよ、生とはいかなるものか。
- それぞれの衆生に、それぞれの(衆生の)種類の、生まれ (jāti)、誕生 (sañjāti)、入胎 (okkanti)、生起 (abhinibbatti)、諸蘊の出現 (khandhānaṃ pātubhāvo)、諸処の獲得 (āyatanaṃ paṭilābho) がある。比丘たちよ、これが生であると言われる。(PTS, vol.2, p.3)

アビダルマ仏教(法蘊足論)には

- その場合、生、誕生、入胎、生起、出現(prādurbhāvaḥ)、蘊の獲得(skandha-pratīlabho)、界の獲得(dhātu-pratīlabha)、処の獲得(āyatana-pratīlabha)、命根の獲得(jīvitendriyasya prādurbhāva) という(これらが)生である。

Dietz ed. *Fragmente des Dharmakandha*, p. 62

原始仏教に見る生 (jāti)

- 相応部Ⅱ, 「夜叉との問答」から

「(世尊曰く)最初にカララ (kalala) があり、カララからアツブダ (abbuda) があり、アツブダからペーシー (pesī) が生じ、ペーシーからグアナ (ghana) が生じ、グアナからパサーカー (pasākha) が生じ髪、毛、爪が生じる。

そして、母が食物、飲物の食事を摂れば母胎にいる人は生長する」

原始仏教に見る生（胎内五位）

- カララ・・・小さな塊、原初の生命の発生状態
水に浮くゴマの油の一滴のような状態
- アツブダ・・・カララから七日が経過した状態
搗りゴマの純粋なエキスのような状態
- ペーシー・・・アツブダから七日が経過した状態
さらに純化した蜜のような状態
- グアナ・・・ペーシーから七日が経過した状態
鶏の卵の形のようなもの
- パサーカー・・・グアナから七日が経過した状態
四肢への分化が始まる状態

俱舍論が述べる生

- 「胎児の五つの分位は、カララ、アツブダ、ペーシー、グァナ、プラシャーカーである。胎児のそれはは、時の経過とともに成熟し、母の胎内に包まれて業の熟することによって、風が吹き、胎児のそれを回し母の体の孔に向かわせる。胎児のそれはは、おそるべき汚物の塊のごとくに、極端な状態にあるので、生れ落ちて、苦に悩む。」(大正29巻47頁下段)
* 業の作用により、生れる前から「苦」を負っている

俱舍論が述べる誕生

- ◆母胎に相続する刹那における (pratisam̐dhikṣaṇe) 五蘊が識 (vijñānaṃ) である。(AKBh. 131.25)
- ◆その業により、再びこの世から死去した者 (itah-pracyuta) に未来への相続がある (pratisam̐dhibhavati)。その相続が次なる生である (punar itah)。実にこの世で、その同じ識支 (eveha vijñānāṅgaṃ) が、その彼にとっての、(次なる)生存における生である (janmani jātiḥ)。(AKBh. 132.18-21)

十二支縁起の業報解釈



大乘仏教からみる命

- 「宝積経」巻五五、五六の特徴
 - 胎内の生存期間を38週としている。
 - カララは「地・水・火・風」の四大によって成立。
 - 四大の中では「風」が重要視されている。
 - この風を「業風」と規定している。
 - つまり、業風＝生長の根本動力
 - 風は静⇒動をつくる。
 - 胎児の「動き」はこの風による。
 - この動きは「息」となる。
 - つまり「業風」＝「息」

「空」から命をとらえる

- 絶対否定の境地（龍樹著「中論」～縁起生～）
 - なぜ、業は生じないのか？ それは無自性の故
また、業は不生であるから滅しない。
 - 業は縁により生じるものではない、縁から生じないものでもない、そのゆえに作者も存在しない。
(第7章 21偈、29偈)
 - 業により主体が存在し、主体により業がある。
我々は、それ以外に存在の成立理由を見ない。
(第8章 11偈)

* 業⇒主体⇒業⇒縁起生＝命

法華經の教えから

■ 久遠実成とは何か？（「如来寿量品」から）

- ・ 釈尊＝仏陀 ⇒ 人間存在の完成
- ・ 「久遠」＝時間系の否定

∴ 時間的観念に束縛されない人間存在の完成態。

仏陀（の身体）は、時間否定によっても存在する？

* 「法」という形態によって存在し続ける。

「法」とは何か？

善き人の正しい法は老いることはない。善き人はお互いに理法を説き、聞く。（ダンマパダ151偈）

日蓮聖人の生涯に照らして

■「我不愛身命 但惜無上道

(われ、身命を愛せず ただ無上道を惜しむ)」

(「勸持品」第十三)

- 「命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれを延ぶるならば千萬両の金にもすぎたり。法華經の一代の聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆへぞかし。閻浮提第一の太子なれども短命なれば草よりもかろし。日輪のごとくなる智者なれども夭死あれば生犬に劣る。」

(「可延定業御書」より)